

市)

九月 第二中隊に配属(樺太島西能登路

岬)

昭和二十年八月三十日 ソ連海軍上陸して武装解除、

抑留生活始まる。

十月二十三日 ハバロフスク州ポートワニ

(現ワニノ市)上陸。ホ

トー収容所に入る。

昭和二十三年五月二十五日 高砂丸にて舞鶴港上陸、

同二十八日復員。

(北海道 木呂子 敏彦)

シベリア収容所回顧

岩手県 立石 章

ジマ到着の夜

(イルクーツク北方二五〇キロメートル)

「シベリア」は象徴的な呼び名であり「悲しい場

所」の代名詞でもある。その大陸を列車はもう何日走り続けたのだろう。もうどうすることも出来ない流れの中に身を託し、雲煙万里の北の果て、見渡すかぎり茫漠とした無味乾燥の白い山野を、あてもなく彷徨するかのように雪のちらつくバイカル湖畔を右に左にくねりながら走り続けた。暗澹とした疑心暗鬼の憂いに閉ざされた毎日だったが、今晚とうとう俘虜生活を余儀なくされた運命の地「ジマ駅」に到着したのだった。

到着は深夜のこととて貨車内は物音ひとつせず皆寝静まっていた。やがて列車は再びゆっくりと動き出すと、線路が急カーブしているのであるう、レールと車輪の擦り合う音が「ギーギー」と鳴りだした。その異様な音に目覚めた者もいたようだが、だれ一人、声として発する者もなく、唯々無言で不安におののきながら、これからの運命を暗示するかのようなその不気味な音を聞いていた。どうやらジマ駅から街中に通ずる終着地である引込線に入ったようである。

ソ満国境の街ブラゴエシチェンスク乗車当初はウラ

ジオ經由帰還の夢を捨て切れず、未だ半信半疑、シベリアの果てに瘦せ衰え朽ち果てゆく姿と、日の丸の帰還船が波をけたてて祖国に向かう情景が胸中を交互に去来し、その不安と願いの交じり合ったものが四六時中まつわりついていたが、ここまで来てしまつては濟度すべからざる悲鳴となり、帰還の願ひは一切夢と化し無と消え去つて誰も意氣消沈、がつくりする。

もうこうなつたら行雲流水のなりゆきまかせ、シベリアの果てだろうが、地の果てだろうが、どうにでもしゃあーがれ、といった諦めの境地となり、皆、焦点の定まらぬ、うつろな目を中空に据えていた。

列車は街中の幅広い道路上の引込線に停車し朝を迎える。道路に沿つて平屋建てや二階建てのアパートのような古びた素っ気ない木造家屋が隙間なく、くつつくように立ち並び、道路上の列車と合わせ眺めた景觀は、なにかエキゾチックで、西部劇に出てくる町と似通つた感じだった。

その日はもう一晚、貨車内泊まりとなり、やがてシベリアの短い昼は暮れ、夕闇が迫つて来た。僅かに暮

れ残つた夕空を背に、黒いシルエットとなつた家々に灯がつくとそれぞれの四角い窓が薄みかん色にあちこちと浮かびあがり、その幻想的な景觀にしばし見とれた。

しかしこのような雰囲気に入るなどの余裕は我々にはない。輸送任務で同行してきた警戒兵どもが虎視眈々狙っている我々の腕時計や万年筆、まだみんなどこかに隠し持っている。彼らの任務ももう明日限りで、お土産としてそれを手に入れるチャンスは今夜だけしかない。奴らによる乱入、押し込み強奪の噂が立つた。奉天出發以来の彼らの行動からして容易に想像されることであり、その予感を持たぬものは誰一人おらず、どう対処すべきか問題となつてきた。対抗策としても、こちらは囚われの身、抵抗は無理。窮余の策は貨車扉の内鍵を施し全員狸寝入りの上、絶対戸を開けないこととし、この防衛手段は各車両またたく間に伝播徹底された。これも彼らと長い旅で培われた保身の術であらう。

芝居の場面が幕によつて一転昼から夜に変わるがこ

とく、車内はつい先程とはうって変わり静寂の闇に鎮まりかえり、沈黙と緊迫がみなぎり全身ハリネズミのように警戒のトゲを張っている。息を殺して今か今かと招かざる客を待つことしばし、突然我が後頭部で警戒信号のブザーがなった、車外に人の気配を感じたと思う瞬間、ロシア語の叫び声、そして開かぬ戸を激しく叩く音がした。予期してはいたものの狼狽は隠せぬ。うろたえるとともに恐怖がつのる。「奴ら来やがったな」と身構えるが、心臓の鼓動は更に高まる。

それでもジッと息を殺して無言無視を続ける。いいかげんで諦め退散するものと思っていたが、さにあらず、前にも増して激しくどなり立てるばかりで一向に止まない。しつっこ過ぎるのが気になるとともに、大声でわめいているのは警戒兵ではなく輸送指揮官らしく、兵隊ならともかく指揮官では何か容易ならざる事態発生かと、同じ貨車内に同乗の隊長は、能の「船弁慶の義経」のごとく、「その時少しも騒がず」と覚悟のほぞを固め戸を開けるよう命じた。

戸口の外に立っていたのはやはり輸送指揮官で大分

酒が入っていた。隊長と何か事ありげに話し合っていたが、やがてテキは二人のロシア女をつれてきた。その話の筋を手とり早く話せば、ソ連の指揮官（下士官と思う）が欲望処理のため、事もあろうに我が車両をラブホテルの一室に提供しろとのことだったのである。

とき、これ、昭和二十年十一月某日、夜のことであつた。

ジマ第五收容所 医務室のロシア軍医

ジマ收容所の医務室には、ロシア側のじいさん軍医と比較的若い女軍医がいた。女軍医は芳紀二十五歳ぐらいか、長身瘦軀でその歩き方が勇ましい。肩で風をきり、大股で早足、胸を張りカッカカッと靴音を響かせダイナミックに歩く。彼女が近くを通り過ぎるとフワッと風圧が生じるほどの闊達さである。飛びついたくなるような、また息を呑む程の美貌とまではないが、インテリ型のまあ美形の方に属するであらうか。

名簿を見ながら我々の名前を呼ぶ声は凜として響きわたる。笑顔を見せたことがない。いや無理に慇懃冷厳を装って笑いを押さえていたようだ。我々の名前のロシア語による発音の一部を読みちがえて呼ぶことがある。これに気付いた時、一瞬恥じらいに相好を崩し笑いかけるが、「ヤーメタ」といった表情に戻ってしまう。おかしかつたら笑ったらと思うのだが、なかなか笑顔は見せない。我々の抑留生活は浮浪児と大差ない不潔極まりない状態なので無理からぬことながらも、医者のかせに我々を診るのに裸の体に一指も触れぬのは、ケシカラン。それに美人にありがちな陰がある。とにかく可愛げが微塵もない。が、しかしいつもあの鋭い知性らしきもので表面を覆っているが、その鎧の下には案外、情の深い色気が隠されているように思えてならないのである。

じいさん軍医の方は六十歳ぐらいか、一見して軍人らしからぬ無口で朴訥といった感じで、頭髮、眉、口髭は白毛まじり、そのごま塩の眉毛はひさしのように長く垂れ、その隙間の中で小さな目が優しく光ってい

る。口髭も厚く長く、口全体を覆い隠し、一見してその顔はペットのテリア犬を彷彿させる。そして人間的な親しみある泥臭さと実直さが感じられる。早く言えば威厳という不必要な衣をまとっていないことである。無口らしく余りしゃべらないようだが、僅かに顔をほころばせることがあったがその笑顔は実に優しくかった。言葉の通じない逆境の身にとって、この笑顔が私に語りかけ、心に何よりの潤いを与えてくれたように思える。言葉はなくとも心の通じあえることを痛感した。

厳しい冬も峠を越え、春の息吹を感じられる頃、みんなの顔にもやや明るさが戻ってきた頃の事だったと思う。街のサウナ式蒸気風呂浴場で、シラミ駆除と防止上から陰毛と腋毛の剃り落としが行なわれた。腋毛の方はじいさん軍医が小さくて短い剃刀を使っており、子供の頃おやじが散髪してくれたときに使っていたものと同じで、いわゆる和剃刀のようであった。腋毛剃りは腕を上げるだけで剃り面は大体平面状になるので比較的簡単、じいさん軍医は無言のまま懸命に

剃ってくれた。一方陰毛の方は、今は亡き杉田さんが洋式剃刀を持ち椅子に座り、その前にバケツを置き、我々は足を両開きしバケツの上に立つ、剃り落とされた陰毛はバケツの中に見事落ち込むという寸法である。しかし、剃り手は悲戦苦闘、上から下から左右から体をよじったり、かがんだりし、残毛なきかを眺めすがめつの大奮戦で、どんな手慣れた名人級の剃り手と言えども時間はかかる。

腋毛剃りのほうが一段落したのか、じいさん軍医は剃刀を手にしたままそれを眺め、見入りながら、好じいさんらしい笑みを浮かべていた。このじいさん軍医の横顔を眺めていると、腋毛を剃ってもらったというありがたさとも重なって、ほのぼのとした人間味が漂ってきて心の温もりが感じられた。

身体検査、別名「尻つまみ等級査定検査」が医務室で行なわれたときの事である。並んでいて順番がきたとき、前にいた一人が体の変調をじいさん軍医に訴えた。と、じいさん軍医は軍服のポケットに手を差し入れると、奇々怪々というか、摩訶不思議というか、誠

に妙クリンな品物を取り出した。俺はそれをしげしげと眺め、さらに目を細めてよくよく見ると、長さ十五センチメートルぐらいの棒状で両端が直径五センチメートルぐらいのオチョココの形をしたもので、棒は中空状で、何物なるかと思ったら、なんと聴診器だったのである。

それは木製白木作りで、コケシ人形を作るような機械で作られたものであろう。このような聴診器は生まれてこのかた見たこともなかったので、これを取り出したときは何をするのかと目を見張った次第。赤ん坊が見たらオシャブリと思い、泣いて欲しがるだろう。

軍医は、やおらそれを手に体調が悪いという同僚の前に中かがみになり、ラップ状の片方を患者の胸や腹に当て、更に己が手で反対側の耳をふさぎながら聴診を始めたのである。この木管聴診器での聴診は、患部の位置により患者に向きを変えさせるか医者が移動して行わねばならず誠に非効率、この原始的道具によるじいさん軍医の動きまわる姿はいささか滑稽にさえ感じられた。しかし考え方によっては、小型でポケット

収納が容易、管が木製で短く直管なので聴診効果は勝るとも劣らない、それに木製だから金属や樹脂製のよりに冷たい感触を受けないなど利点も多くある。

さてここまで随分とじいさん軍医びいきで、思い入れ過ぎのきらいもあるが、それにはそれなりの理由があり、大袈裟に言えば命の恩人なのである。甚だ尾篋な話で恐縮ではあるが、そもその初めから話さねばならない。

入ッして二年目の冬を迎えたころ、俺は慢性的下痢をおこし「骨皮筋衛門」となって瘦せさらばえ、骨の髄までしみとおる酷寒の雪原でふるえながら、連日何回も尻をまくり気張ったのが原因で、尻の穴からイボ痔野郎が首をだし、そして大量の出血、水鉄砲さながらにほとばしる鮮血が雪を真っ赤に染めた。やがてイボ痔は出っぱなしとなり痛い苦しいで、もう為す術なし、とても作業には出られぬ状態と相成った。帰国後、今は亡き母から聞いたのだが、父も同じ病状で大分苦労したとのこと。どうも父から有り難くない遺産を授かってしまったらしく、シベリアの劣悪な環境に

より発病を加速させたのだろう。

どうにもこうにもならなくなった俺は、じいさん軍医の診察を受けた。軍医は出っぱなしの痔と骸骨化した体を診ると、その場で翌日入院を言い渡したのである。俺の運命もコレッキリの極限でもうだめかと絶望的だったこの時に、じいさん軍医に入院加療を言い渡された時はど嬉しかった事は無い。天佑神助と言えばそれまでだが、救いの手を差し伸べてくれたその時の老軍医の顔が慈悲深いキリスト様か阿弥陀如来様に見える、老軍医の背からも幾筋もの後光が差し、輝いて見えたほど有り難かった。

あのじいさん軍医はもう黄泉の客となっているのだろうか、そして俺とのかかわりなど何ひとつ記憶になく、単なる人生の行きずり出会いのひとつまでであったにすぎないことだろうが、俺にとっては命の恩人であり、あの時に救いの手がなければあの荒れ果てたシベリアの土と化していたことだろう。

だから五十年近くも前の老軍医の顔や姿がいまだに脳裏に浮かびあがり、いつまでも忘れ得ないのであ

る。

ジマ病院日記

病院と同胞の最期

ジマ病院は収容所から三、四キロメートルの距離と推定され、元は病院かまたは宿泊のできる軍の学校のようにも思える。木造二階建ての比較的がっしりとした造りで、付近には古びた民家が立ち並んでいた。病室はベッド数十四位の大部屋が四部屋ほど、その他、重病患者用などの小部屋が若干あったろうか、病室のある本棟の外に炊飯調理棟、暖房ボイラー棟、その他倉庫などの別棟があり、これらを一括して一重の有刺鉄線で囲っていた。収容所にあるような監視塔も、また警戒兵の姿もあまり見かけず、収容所とは違った世界であった。

下痢が続いて衰弱し、加えて痔も悪化し、歩行も出来なくなった私にとって病院での一カ月のベッド生活はまさに天の助けと思えた。

入院患者は炭鉱の町チェレンホーが収容所からの者が非常に多く、地元ジマ収容所関係者は少なかった。外科病室は炭坑内での落盤や坑内電車接触による事故で足や腕を切断したもの、また骨折したものなどで、痛みのとれたものが多いせいか、いつも明るく賑やかでソーラン節や炭鉱節が聞こえることもあるが、太股から両脚切断のAさん「ダルマさんになってしまい、故郷に帰り父母がこの姿を見たらどんな顔をするだろう」と、自嘲的な叫び声に、一刻、沈黙の病室に変わることもある。

ベッドは鉄製であるが、ここにも我々を悩ます敵がいた。あのジマ収容所の壁面を運動会よろしく傍若無人に徘徊し貴重な血液を吸われた憎き南京虫で、収容所ほどひどくはないが、ベッドの鉄板合わせ目の隙間に巣を作り夜な夜な悩まされた。骨折で太股までギブスをした患者がギブスを外すまでの一カ月間、夜ごと奇声を発していたのは滑稽でもあり、また同情を禁じ得なかった。

この外科病室とは対照的に静かで暗い雰囲気の内科

病室は小部屋で、結核やその他内臓疾患の重病者で、故国へのダモイを果たせずシベリアの土と化したのは殆どこれら同胞達であつたように思えた。

島根県出身のFさんは、重度の栄養失調、まるでバッタのような手足、床擦れもひどく、寝返りから下の世話まですべて隣の戦友の世話になる。やがて食事を受け付けず意識不明となる。喉にからんだ「たん」が呼吸に同調してゴロゴロと鳴る。夜になり消灯された暗闇の病室にその音のみが異様に響きわたる。戦友の最期を見届ける者、とても耐えられぬと両手で耳を塞ぎ毛布をかぶり無理に眠ろうとする者。明け方まで続き、そして静かに息を引き取る。皆合掌し冥福を祈る。薄幸の友よ、遠い故郷で彼の帰りを待ちわびている父母との再会を果たせず、さぞ無念であつたろう。やがて病院側の指示により骨と皮だけの遺体の下着を脱がせ、洗濯はしてあつたが布地部分より穴の方が大きいボロボロの下着に着替えさす。物が不足しているとは言え、ここまででなくともと怒りを通り越し、ただ啞然となる。今度は雑役婦が両手両足を紐で縛つ

た。なぜこんなことをと再びいぶかったが、その理由はすぐに解つた。酷寒のシベリアでは、屍体の手足がばらばらの状態のままで凍りつくと、その保管、運搬、埋葬など、処置に困るからであつた。遺体は担架に乗せ雑役婦により何処かへ運ばれて行つた。

ジマ日本人墓地

東方がやっと白みかけてきたがまだ暗い。

あちこちの家から朝食の炊煙が、無風の暗い空間に銀色に垂直にゆっくりと立ち昇っている。三十分も歩いただろうか、街はずれにきてやっと明るさが増し、あたりの風物が眺められるようになってきた。上空には水蒸気の層でもできるのか、シベリアの冬空は毎日が霧状のベールに覆われ、太陽や青空など望むべくもない。強いて変化を求めれば、他より幾分明るいところが太陽の位置であろう。その空の下、我ら四人（入院患者の中で比較的病状が回復し、ある程度の作業可能と判定されたもの）は、重いシューパーに大手袋、肩に鉄棒のいで立ちで、ジマ市北方の、鉄道線路に沿つたなだらかなスロープの坂道を墓地へと向かつて

いた。

死亡者続出で、軽作業者が選ばれ急ぎ墓穴掘りを命ぜられたのである。坂道を登りきった鉄道線路と反対方向の六百メートルぐらい離れたところに、木立に囲まれたロシア人墓地が見えてきた。簡易な木柵に囲まれているが、その外周や内部は樺科の常緑樹に覆われており、何処までも広く白い雪原の中で、その単調さを打ち破るようにここだけは緑葉が映え繁っていた。ロシア人墓地の中を覗くと、ロシア正教であろうか墓標は飾りゴシック調十字架あり、キの字形のものあり、また十字架のてっぺんから両側に傾斜板を取り付けたものもあった。これは木製十字架を雨や積雪から守るためのもので、飾りではないと思われた。石塔の形も多様で、好みに応じたものをつくっているように見えた。個々の墓の敷地は思ったより狭く、周囲が広大な原野のためか、なにかせこましく、あたかも肩を寄せ合い寒さを避けて暮らす小部落のようであった。

この墓地に隣接したところが亡き戦友達の眠る場所

で、北側は雑木林、西側は鉄道線路、東側はなだらかな起伏を重ね合わせている広漠たる原野であった（北・西・東の方向については自分なりに感じたものである）。既に埋葬された戦友達の墓は、単なる盛り土で、その上に幅十センチメートル×長さ十五センチメートルの木板に三桁の数字が記された立札で、恐らく二、三年で朽ち果てるであろう。この真新しい墓標が五十ぐらい最果ての凍土に寂しく並んでいた。

病院を出るとき七十歳ぐらいの小柄で無口な爺さんから渡された先の尖った鉄棒で、雪と土の混じりあった凍土の表面に墓穴の地取りをし、この線に沿ってここつと凍てついてコンクリートのように硬い地表を根気よくたたく。跳ねた土や氷が目や口に飛び込む。

二日目ぐらいからこの作業の要領を体得するが、それでも一穴に二人で二日ぐらいかかる。鉄棒の先は三日ぐらい使用すると丸くなり効率ダウン。あの爺さんが先を尖らし焼き入れたものと交換してくれる。野ざらしの原野、冷えきった熱伝導のよい鉄棒は、分厚い大手袋も効き目は少なく、突き刺すような痛みが間断

なく両手指を襲う。

休憩時の焚火材を雑木林で探すも、雪の凍り付いた小枝は容易には燃えない。手っ取り早い方法でとロシア人墓地裏手の木柵を壊して燃やしたが、警戒兵に見つかってしまった。相当怒られると覚悟したがそれ程でもなく、元通りに復元しろとも言わず、ほっとする。よそ者の若い兵士のこと、俺にはあまり関係がないといったところであろう。

警戒兵は作業現場にすることが少なく時々姿を見せるだけ、何処か暖かい良い所を探し遊びに行っているらしい。我々の監視だけが任務で、ノルマについては入院患者のため、その責任がないのであろう、殆ど口を出さない。あのダワイダワイがないことは本当に助かる。

貨物列車が凍った空気を揺るがしてハーモニックに響き余韻を残して通り去った。この列車が通ると、あと一時間程で携行の昼食、三百グラムの黒パンが食えると思うと鉄棒にも力が入る。

ある日、いつものごとく作業をしていると、警戒兵

が口に指を当て煙草を吸う動作で休憩を告げ、我々を穴掘り現場の見えない離れた場所に連れ出した。ふと見ると遠くに一台の馬櫓が目に入った。同胞の屍体運搬櫓で、二十分ばかりして再び墓穴に連れ戻された時、既に馬櫓の姿はなく、墓穴に入れられた屍体は見えない程度に雪まじりの土に覆われており、後は我々の手で地上十センチメートルほどの高さまで埋め戻した。雑木林から針葉樹の小枝を探し、それぞれの墓に差し、手を合わせた。薄幸なりし友よ、日毎待ちがれしダモイを果たせず、最果ての凍土に朽ち果てんとす、どんなにか無念であつたらう。

あゝ 辺境の地 シベリアの風は
渺茫たる曠野の枯葉 雪粉を誘い

啾々として遠ざかる 汽笛の音に
埋もれし友の 望郷の念想うとき

誰か この切々たる 哀憐の情に
哭かざるものあらうか

星霜五十年を経たけれども、東方に向かうシベリア
鉄道のレールの響きに呼び起こされる望郷の怨念は、
今もなお消えないであろう。

しかし、やがて春夏が訪れれば、あの最果ての地にも
可憐な美しい花が咲き、あの近くの雑木林は小鳥の
さえずりに賑わうことであろう。

今、この日本人墓地がどのような状態に管理されて
いるか全く分からぬが、土地には事欠かぬあの広大な
原野がありながらロシア人墓地の隣接地を選んだこと
について、種々問題ある相手であるにせよ、先祖から
の墓地の隣に外国人俘虜の墓を何の躊躇もなく造った
ことは、ジマ市民に同じ人間という人種差別や偏見の
ない広い心があったからであらうし、地下に眠る同胞
にせめてもの慰みになるのではと思う。

あの製材工場前の冷え込んだ屋外作業のとき、見知
らぬ年配の一市民が隅の方で隠れるようにして我々に
パンを配っていた光景が思い出される。パンは少量で
すぐなくなってしまうが、一般市民も食料事情が悪
しき中でこの行為で、その恩情は忘れられない。

また、あのロシア人墓地を見て、信仰心の厚い人達
が多いように感じた。墓参に訪れる人達の中には、隣
接墓地の不幸なりし同胞の冥福を祈ってくれる心ある
人もいるのではないと思う。何もしてやれない今の私に
は、せめてそうあって欲しいと願わずにはいられな
い。

トイレと物置き小屋

病院一階の廊下突き当たり奥にトイレがある。患者
用のトイレは十畳ぐらいの広さで、仕切りなどは何も
ない。大使用は洋式のものだが、壊れて便座などはな
い。内部が暗いが、それはこのトイレの屋外に面する
北側ガラス窓すべてが外側から板で覆われているから
で、ガラスの割れたところもあり、防寒上の処置と思
われた。

ある夜遅く病室も寝静まった頃、トイレに行こうと
廊下に出たとき、誰もいない廊下を、若い看護婦二人
がトイレの方から悲鳴に似た声をあげ、ふざけ合うよ
うに駆けてきた。別になんのことはないが、そのしぐ
さが何か気になっていた。

今日も墓穴掘り作業で、既に警戒兵も来て外で待っている。ところが何時も鉄棒を持つてくる爺さんが出発時刻を二十分過ぎても見えない。警戒兵はどうでもよいとばかり看護婦とイチヤつき話に夢中である。作業開始が遅れてもこちらは一向かまわぬが、その分を後に延ばされ帰りが遅くなるのはかなわぬので、病院事務の男に聞くと、爺さんは風邪で休みとのこと。やがてその男が何処からか鍵を持って現れ、鉄棒は裏の小屋の中にあるからと鍵を渡された。病院の裏手に回り、物置きとおぼしき木造小屋の扉をあけたとたん、冷水を浴びせられたかのごとく立ちすくんでしまった。そこは亡き同胞の遺体が積み置かれた屍室で、その有様はあまりにも悲惨、とてもこれを書くことはできない。戸口に立て掛けてあった鉄棒を手取るや、逃げるように外へ飛び出してしまった。

日本人には見せたくない場所を爺さんの風邪による手違いから私が見てしまったということである。その小屋は病院の北側で、トイレの窓に接して仮に建てられたものらしく、トイレ内側から見ると、ガラス窓が

外側から板張りしてあるように見えていた。事情を知る看護婦は、当直の夜のトイレには、別の要因もあることながら、いつも二人連れであったり悲鳴をあげてふざけたりしたものもこれが原因だと初めて気がついた。患者の戦友達には害あっても益なしと思い口外は避けた。それにしてもあの同胞の姿、とても人間としての扱いとは思えない。一日も早く埋葬し安らかな眠りにつかせてあげなくてはならない。残念ながら今の我々に為し得ることは誠意をこめて墓穴を掘ることだけであった。

ロシア美人の葬列

今日は珍しく墓穴掘り作業が早く終わった。いつになく冷え込んで寒い日のことでもあり、たまには早く帰してやろうという仏心だろう。墓地を後にし鉄道沿いのゆるやかな坂道を下って行った。いつもは夕暮れ迫る頃通る道であるが、今日は未だ大分明るく、遠く起伏の続く白い丘並み、ジマの街から立ち昇る煙など見え、いつもの風景とはまた異なる趣を呈していた。

坂道の下方より一台の馬車を先頭に十五人程の黒装

束の女性を交えた一団がゆっくり近づいて来た。異国の地で初めて見る葬列であった。先刻まで我々がいた隣のロシア人墓地に埋葬するのであらう。私にとって異国の変わった風習などが見られるチャンス到来と大いに期待したのだが、馬轡に乗せられた柩のほかは飾り物など何もなく、ただ黒装束でベールをかぶった婆さん達が悲しげに下を向き、とぼとぼと柩の後に従うのみの静かで地味なものであった。

万物皆死した嚴冬の広野に、唯一の生物であるかのごとく馬の白い息だけが際立ち、そして堅い凍土をたたく蹄と滑る轡の音のみが響き、それがまた葬送曲のようにも聞こえる。

通りすがりの異国者でも死者に対する礼儀として一礼し、ぶしつけとは思ったが地上五十センチメートルの柩の中を覗き込む。顔の部分は露出し、そのまわりは小さな野菊のような花で囲われ、胸の上には十字架のペンダントが置かれていた。一般に見られる長方形の棺桶ではなく、何か縁の浅い台のようなものに乗せられていて、蓋も見当たらなかった。三十歳位

だろうか、白系の美人だ。母親が涙ながらに最後の化粧をしてやったのだろう。鼻筋の通った、ややあご骨の張った知的な顔は、あたりの冷氣に一層白くまた美しく感じられた。

ハラショウ・ラボート

今日は炊飯調理場の作業で、なかなか巡り来ぬあこがれの作業、我らの間ではハラショウ・ラボートと呼んでいる。この厨房は本棟とは少し離れた所にあり、病院の食事一切を賄っている。午前中の仕事は燃料の薪づくりで、やや中年の大柄な雑役婦とのアベック作業、二人用ピラ（のこぎり）で丸太を挽く。この作業は既に何度か経験も積み腕を上げたつもりであったが、相手はたくまじき地元シベリア撫子、力の入れ方など扱い方は残念ながら一段上であった。

しばらくして彼女が「ちょっと待って」と言い、傍らの物陰に入り用を足してきた。音も聞こえそうな十メートルと離れていない雪上にいとも簡単に事を済ませた。こちらを男性と認識していないのかとがっかりしたが、帰ってきたとき、ほんの一瞬、恥じらいの素

振りを見せたので救われた。

タボールで薪にし馬櫓で運ぶが、この馬が普通乗馬用のものに比べ一回り小形で脚も短くおとなしい。手綱をとり「チョッチョッ」と発声すると歩きだし、英会話の発声練習のように口中の舌を巻くようにして「トラララ……」と転がすような声で停止する。馬は慣れない者を馬鹿にして動かないと聞か、この小形シベリア馬は他国者の私に対し従順だった。

この馬に例えるのは少々おかしいが、私の接したロシア人達は人種また階級偏見がなく、人を見下ろすような態度に接したことはなかった。これを一言で言えば国民性ということなのか、あるいは国情の違いということになるのか迷うが、このことがシベリアでただ一つうらやましく、また印象に残った。

その従順な馬櫓で薪を運び終わった頃、厨房は昼食準備中で、作業の報酬として待った特別食にありつけることになる。患者食は質が良いが量が極めて少ない。収容所での血と汗で得る糧でさえ少ないのに、ましてベッドに伏す者は当然のことであるが、軽

作業でも患者食と同じでは耐えられず、なんとかして余祿を得て体力保持に努めねばならない。

皿に盛られて出されたのは、薄茶色で一瞬あの高梁粥かと思ったが、口に入れると柔らかな感触と、そして懐かしい味が口中に広がった。「そば」であった。粒状のままに脱穀し米飯状に塩味で炊き上げたもので（ソ連ではそば粥と称している）、そばをこのように粒状で食したのは生まれて初めてであり、また大陸に渡って以来初めてのそば食がこのシベリアであったことも意外で、その美味も忘れ得ぬものとなった。

初め良ければ終わり良しで、午後はじゃが芋倉庫作業である。窓のない小さな裸電灯一つの暗い小屋で、凍結防止から冬中ペーチカの火を絶やさず、温度は5度ぐらいで暖かいところではないが、屋外に比べたら誠に恵まれた環境である。風体のあまり良くない婆さんが管理しており、初対面からこちらをじゃが芋泥棒と見ているよう感じられた。だがそれは、初めから隙あらば若干のお土産をと狙っている私自身の良心からの思惑と言った方が正しいだろう。

作業は運搬と選別区分けである。婆さんのそばに、大きくもなく小さくもない形が揃っていて美味そうなやつが十数個、別に置かれてあるのが気になった。作業が終わりに近づく頃、婆さんは隅の方でこそそこそと何かやっていた。うす汚れた襟巻を広げ、あの充分に選別された芋を念入りに一列に並べ細長にくるむと、ひょいと首に巻いたのを見た。婆さんも一介の使用人、持ち出しは相当うるさいようだ。そちらがやるなら気が楽だとばかり、袴下の中に数個手早く押し込んだ。シューバーの襟を立て首を埋めて家路を急ぐ婆さんの後ろ姿に、なんとも言えないわびしさを感じた。

戦利品の生芋は翌日同じ敷地内にある暖房ボイラー室で焼芋にする。ボイラーは石炭焚きで、男のロシア人が勤務している。石炭運搬など度々しているので顔見知り、焼芋にする方法もこのボイラーマンが教えてくれた。室内の上方の高い所に水平に煙突の筒があり、その円筒の中心部に転げ落ちぬように重心をとって一列に並べて置くと十五分ばかりで焼き上がる。それは十三里の味などの比ではなかった。首を長くして

待つ病床の友の喜ぶ顔を前に、まるで鬼の首でも取ったような気分になるのがまた楽しい。

病室窓からの、たわごと

朝ふと目を覚ました。起床の時刻にはまだ少し間があるようだ。私は規則正しい寝息の聞こえる暗い病室の窓辺にそっと近寄り、窓ガラスに付着した霜を手のひらで拭き払った。患者が十数人もいるこの大部屋の窓は、付近に見られる一般の家々の観音開きの小さな窓と違い、室内を明るくするため学校の教室のように壁面いっぱい大きな窓である。

そしてこの窓からは病院に面した幅広い道路やその道路の向かい側にある一群の街並みが望まれ、特にまだ暗い夜明け前後に見られるエキゾチックで神秘的とも怪奇的とも言えるひとときの景觀に私は魅せられていたのである。だが、この窓はシベリアでは当たり前のことだが二重ガラス構造で、その中空部分のガラス面も結露白濁しており、開閉できる扉もないため、いつでも窓外を眺められるという訳にはゆかない。しかし外気と室内の相対温度差の関係だろうが、至極まれ

なことであるが窓ガラスの上半分ほど曇りのとれてい
る日があり、この時がまだ明けやらぬ早朝の窓外を眺
めることができる唯一無二のチャンス、好機逸すべか
らずの時なのである。

冬のシベリアにおける日々の営みの始まる朝は、長
い暗闇の中から始まる。まだ明けやらぬ夜のしじまに
森羅万象皆くろぐろと静まりかえる街中は、家々の朝
餉の炊煙が無風の暗い空間に垂直にゆっくりと数条立
ち昇り、その銀色の帯は神秘的で威厳をも現し、しん
しんと立ち並び、立ち静まっている。僅かな光が白煙
に反射し、暗闇の中にそれを浮かび上がらせているの
だ。それは白樺の疎林を想わせたり、またこの世なら
ぬ世界のように奇怪とも不思議とも思える様相を呈し
ていた。

そしてそのうち東方が白みかけてくると、それも静
かに色あせて、ただの薄い目立たぬ白煙になるとも
に霧の中に家々がうすぼんやりとした墨絵のようなシ
ルエットを描き出し、そして徐々に街並み全体が視界
の中に収まってくる。その街並みの陰影は、もやや光

線の具合で、あるときは平面的に、また立体的に見え
たりする。やや明るくなってくると霧中に廃屋めいた
古い家並みが現れ、今度は怪しい雰囲気包まれ奇怪
至極、廃墟の中の墓場のように妖気が漂い、フランク
ンシュタインがぬっと出てきそうな無気味な雰囲気さ
え感じさせるのである。

さて、ここまで読まれた抑留体験者の皆さんは、な
にを独りよがりの太平楽な夢をほざいているのだ、あ
の四面楚歌の中、骨のずいまで身にこたえた極寒と飢
餓地獄、そしてまた過酷な労働、いつ思わぬ病や危険
に出くわすのではと絶えず怯えながらその日その日の
無事を神や仏に加護をと祈り、果ては昼の労働に疲
れ、着の身着のまま泥のように眠りこける毎日の中
で、そんな少女趣味的でつかみどころのない仰々しい
感情など湧いてくるかと反論されると思うし、私もそ
の通りだと思う。異国の風物の珍しさに気づいても、
己が感情にこれを訴え、ことさら深くかわろうとし
たり、まして風景を愛でる情感など、爪の垢ほども、
いや足の小指の股に溜まったゴミほども持てないであ

ろう。

私はこの病院で一カ月余のベッド生活をした。患者たちは、病状が回復してくると最大の関心事は生物自己保存の根源たる食することである。おはぎとぼた餅はどう違うのか、大衆食堂と高級ホテルのカレーライスは何かどのように違うのか等々、料理教室顔負けの内容濃密な解説や論説、そして珍説がつぎつぎと果てしなく続く。その献立に喉がゴクリと鳴り、舌舐めずりし、果ては湧き出ずるよだれを漏らさじと、あわてて「むっ」と口元を閉じる。しかし、いくら飽きないとはいえ、日がな一日、四六時中これ続ける訳にもゆかない。ますます空腹感を募らせ腹の虫が騒ぎ立てるのを助長するだけである。そして外へも出られず、ダモイの朗報もその見通しもない。果てはベッドにもぐり、人それぞれ時それぞれの瞑想や迷想、さらには愚考、そしてまた時には深い思索の森をさまよい歩くがごとき品格ある思考にふけったりすることだつてあるのである。収容所にて血と汗の労働を強いられる、た皆さんのことを考えると心苦しいことではあるが、

要するに快方に向かいつつある患者たちは、行動の自由はないが、そのかわり教養と独り思考と想像の世界に浸ることについては充分な自由時間を与えられたのである。

私は半世紀を経た今も、シベリアの風景を思い出す時、何故かあの窓からの景観が脳裏に浮かび上がってくる。そしてその過去の幻影を思い起こすたびごとに無意識のうちに己が感情に彩られ、いくらかずつ尾ひれがつき粉飾されてきたことに気付いた。だから当時感じたものと今脳裏にあるものと全く同じであると断言できないし、誇大妄想気味に育ってしまったかなと自問自答したりしている。

あのシベリア暗黒時代を思い起こすと肌に粟を生ずる。ダモイした当初は、シベリア逆戻りの夢にうろたえ、悪戦苦闘、四苦八苦の冷汗で寝覚めの悪い朝を迎えたこともたびたびあった。どうせ悪縁とすっぱり縁が切れぬなら、これを逆手にとり夢想するロマンチストのごとく、そして精神衛生上から想い出は明るくたわいのないものにならうと思うともなく思い、丈夫で

長生きしたいなと考えるようになってきた。ちょっと寂しい嫌な言葉だが、自然の法則であり生者必滅の道理である死というこの世の出口も、もうそんなに遠いところではなくなってきたのかなと思ったりするこのごろなのである。

さはあれ、夢は人生にとって必要不可欠なもの、その秘かな夢の世界に遊ぶことも幸せなのである。あの霧中の光が織りなす一連の移りゆくパノラマは、幽玄の淵をさ迷い五感の世界を超越して、これ一幅の絵か、一連の詩かとまで、いまだに私は昔日のおもかげを彷彿し続けているのである。

ボイラーマンとの、ひとときの会話

ジマ病院構内には病室のある本棟から少し離れたところに暖房用ボイラー室があり、屋外作業のときなど我々にとってまことによい休憩所となり、しばし暖をとらせて貰うことがあった。男二人が勤務し、やや年配の者ともう一人は我々とは同年代の青年である。

ここシベリアで働く一般人は女性が多く、男では中年か老人と相場が決まっており、軍人以外でこんな若

い青年を見るのは希有な例に属する。背が高く色白で一見ハンサム、五体満足なことから傷痍兵ではないようで、恐らく疾病で兵役免除となり、国命を甘受してか自己意志なのか解からぬがこの病院のボイラーマンになったのであろう。

今日は構内倉庫の補修作業があり、久し振りにこのボイラー室を訪れやっと手に入れたマホルカ煙草の紫煙をくゆらせていると、突然くだんの青年が話しかけてきた。言葉が通ぜずとも、お互い胸襟を開き意思の疎通に誠意誠実を示せばそれ程不自由さもなく、不思議と思えるくらい通ずるものである。

この彼等との会話についてだが、お互い異国人である以上これという目的はなくても好奇心があり、日常生活のことや諸々知りたいという欲望は余程の朴念仁でない限り誰もが持つものと思うのだが、当方の意思とはうらはらに相手が消極的で乗ってこないことが多い。勿論言葉の障害がその要因の一つであることに違いないのだが、どうもそれだけではなく、会話を避けようとしたり、また必要最小限しか口を開かない。端

的に言えば余分なことは一切話はしませんが明らかに感じとれた。

軍直轄の病院であり、相当きびしい箱口令がしかれているのであろう。看護婦や雑役婦は、人柄は悪くないのだが、日常口をきくのは挨拶と、あとは痛いのかゆいの、すべったの転んだの、その場限りのくだらぬ会話だけ。珍しく彼女の方から口を開けば、病室の窓から見えた馬轎や自動車を指さし、東京にもあるのかと聞くぐらいが関の山なのである。だから「毎日歩いて通勤しているの？　ここからジマ駅まで一時間ぐらいかかるの？」など誘い水をかけても肯定も否定もなく、微笑でごまかされたり、馬耳東風、黙殺拒否の反応を示し、話にならないのである。

さて話を前に戻して、ボイラー室の青年は私に対して手真似で説明を始めた。ちょっと戸惑ったが、その仕草などからどうも船らしきことが理解できた。次に手指で幼き頃障子に映して遊んだ影絵の狐の形をつくり、その口をバクバク動かしながら数字を言い始めた。相手の演技を眺めながら眉根をよせ首をひねくっ

て考えた末、なにか厚み寸法を示しているのが解ってきた。多少ニュアンスの違いはあると思うが、これを翻訳すると「日本の軍艦はすごい、鉄板の厚みが五センチメートルもあるんだってね」と言ってるらしい。たったこれだけの言葉なのに理解するのに三分の時間を要した。私は半信半疑ながら「うんうん」とうなずき、両手で大きく船の形状を、さらに指で厚みを示す動作をすると、「ダダダ」と機関銃のような返事が返ってきた。どうやら彼らには日本海海戦におけるバルチック艦隊せん滅の歴史イメージ、そして戦艦大和、武威の情報が彼ら末端にまで流れていたのである。

口に蜜あり腹に剣ありで、彼の本心がどのようなのか定かではないし、また単に偶発的なものかもしれないが、開口一番、我が祖国に対する好意的な発言は嬉しかった。さらに善意に感じとれば、その言葉の内に君たちは俘虜となり気の毒だという色合いがこもっているようにも思われた。こいつはどこかで波長が合うぞ、歯車も噛み合いそうだと思わず膝を乗り出し

た。ここで私はひと思案、先日生手を手に入れた時このボイラー室で焼かせて貰ったが、またいつの日か焼かせて貰うためには彼らの虚栄心や自尊心をくすぐり満足させることが今の我々には必要な処世術であり答礼でもあり、かつ相互の理解融合を図るものだと思ひ、「ソ連の戦車も優秀のようだね」と手真似で伝え、とたんに相好を崩し、今度は天真爛漫に「ダダ・ダァー」と歌のようにメロディがつけられ、はね返ってきた。私は、してやったりと心の中でニタリと笑った。

ここで戦争に関する話題は打ち切るべきであったが、ついつい弾みがついてしまう。我々はいつも受動的で隷属忍従を余儀なくされっぱなしの状況にある。たまには、そしてちょっとぐらひは能動攻撃的に名譽挽回という氣も起こってくる。瘦せても枯れても落ちぶれても俺は陸軍航空隊の一員である。かつてはノモンハン事件の際、バイカル湖上空までも制空し、己が意のままにしたあの老雄九七式戦闘機、そして二式戦など、我が分身のごとく油にまみれかわってきたの

だ。そこで話題を航空機に移そうと再び手真似で話をすすめる。だがその内容が通じ始めたなと思われて間もなく、自分の意思が相手に与える反応を読み取ろうと微妙な戦いの様相を示してくると同時に、己が反射神経が危険をはらむ雲行きを察知した。これはまずいぞと不吉な予感が胸中を走った。そしてまた手を焼かせて貰う我が野望が木々端微塵の御破算になる懸念が、危機感が疾風のごとく脳裏を駆け抜けた。相手を怒らせては元も子もなくなる。逆境の中では柔軟適切な処置が必要だ。「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」であり「出る杭は打たれる」、さらには「風を見て帆を使え」である。話はうやむやにするのが最良の策と、今度は言葉の通ぜぬのを幸いとし、事は簡単、曖昧模糊でちゃんばらんの会話に、そして無理に作った笑顔でごまかし一件落着、事なきを得た。やれやれと一息つき安堵の胸をなでおろした。

ソ連軍曹の家

病院の軽作業をしていた私は、ある日この病院前の街中にあるソ連軍曹の家へ雑用手伝いに行くことに

なった。病院内では、墓地の穴掘り作業のとき同行のため派遣されてくる警戒兵のほかにはソ連兵を見かけることは殆どない。特に病室のある二階への立ち入りは禁止されているのか全く見たことがない。しかし夜間だけは一階の部屋に交替宿直勤務していた。

軍曹はその警備責任者のようで十日程前から昼間も顔を見せているのだが、我々にはいつも笑顔で接してくれるし、また小柄な体軀のこともあって、なにか親和感を覚えさせるものがあった。ある日の午後、仕事もなくブラブラしていると軍曹が現れ、俺の家に仕事に來いということで同僚と二人で出かけたのである。病院前に出ると、凍った道路は轍道となって幾条もの白く光った筋が博多帯の縞目のようにずうっと道の果てまで続いていた。

ここはジマ駅から一キロ半ぐらい離れた所だろうか。祖国ならどんな辺びな田舎街でも、さしずめタバコ屋や雜貨店などの赤や黄の色彩鮮やかな看板のひとつやふたつ目についたり、路傍をうろつく犬や小走りに横丁に姿を消す猫など見かけ、みんな生きているん

だなあとといった情感や風情を漂わせ、またそれぞれの家毎に一喜一憂、憂世哀歎のドラマを秘めたたずまいを感じさせるものだが、ここシベリアの街はそういったものは無縁の感じを受ける。どの家も年をとり黒ずんで廃屋めいた木造家屋、光を失い重く沈んで、そっけないというか、また侘しいといった空虚な情感しか湧いてこないのは、己が虜囚という境遇のなせる業なのであろうか。

表通りから横道に入ると家もまばらになり、そこかしこに空き地も見られる。夏ともなればその空き地や庭の一隅に自家栽培のタバコやニンニクの小さな繁みが見られるのではと思うが、今はそれもなく、凍土の上に黒ずんだ家々がそこそこ非計画的に勝手気ままと思えるほど不揃いに建ち、陰々としたものの悲しい雰囲気をも少しだしている。

誰もが後ずさりする悪名高き極寒不毛の地、加えて転々と移住する者もあり、土地も住居も国有物なれば所詮家はほんの一時の借物、だからその家を自費で美しくアクセントをつけたり、垣根をめぐらし常緑樹の

庭木や立ち木を育て、うるおいのある環境をつくろうなんて気持ちが湧いてこないのは無理からぬこと、このそっけない殺風景さも、そんな素地が敷かれていれば当然のこと、然るべくして成ったということだろう。そんなことを考えながら歩いたら十分ばかりでも軍曹の家に着いた。

彼の家のみすぼらしさも付近の家にひけをとらぬほどだと思ひながら、軍曹の後に続いて家の中に入ったその瞬間、見た目の先入観とはうらはらに、ばあっと明るいきらびやかな突然の光景に眼を奪われた。

景勝地を走る列車が暗いトンネルを抜け出た時のごとく、あるいは三尺玉の大花火が夜空いっぱい花開いたごとく、華麗というか優美と称すべきか、そして流れ漂うロマンチックな雰囲気思わず「ホホウー」と感嘆のため息を漏らし、ただ呆然、うつとりと眺めまわした。

壁紙を張り替えたのであろう、眼が吸い付くばかりの色鮮やかな模様の壁面、その一隅に風景画の額、窓には純白のレースのカーテンが一流ホテルのごとく中

央から左右に流れるように弧を描いて垂れ、そしてこの六畳ほどの部屋の中央には大きなダブルベッドと真新しい夜具がわがもの顔にでんと居すわっていたのである。ここで初めて彼がほやほやの新婚であり、愛の巢であることに気付いた。泥の中で明け暮れる俘虜生活が長く続くと視覚神経も随従麻痺し平衡感覚を失い、それ程でもない少しばかりの綺麗さもみんな金銀珠玉や金殿玉楼に見えてくる。彼はこの寝室に全智全能そして全財産を傾けたのであろう。あらためてのぞき見た軍曹の顔は得意満面、両の瞳は輝いて、まさに幸福の絶頂を謳歌するそのものであった。

狭い寝台脇を蟹の横這いのようにすり抜け、さて隣の部屋はと想像と期待をかき立ててやおら眼を転じ見れば、食堂とも台所とも思える部屋でうす汚れて暗く、素朴とも質素とも言える古色蒼然たる粗末なテーブルと水がめ、それに台所用品が若干といったなんとも寂しい状態で、私は国際劇場の華麗なるフィナーレの舞台から脚を踏み外し楽屋裏の奈落の底に転げ落ちたといった感じを受けた。一つの仕切り壁が、表裏二

つのかけ離れた世界を見事と言える程あざやかに断ち切っていた。ただしこれに似通った現象は、実は我が家でも来客のあるときなど見られるので他人事として笑えない。そして隅の方に眉目うるわしく才たけての新品であろう奥さんが立っていた。素直でうぶで恥ずかしいのか、それとも擦れっからして横着で面倒臭いからか解らぬが、「こんにちは」の挨拶一言以外、口をひらかなかった。手伝い仕事は新づくりその他雑用で、二時間ほど鼻歌まじりで終わってしまった。

ここで私と同僚は同じ疑問を抱いた。一体軍曹は何のために我々を連れてきたのだろうと。そしてどうもこの美しき新居を見せたいという願望が主たる理由であるように思われてきた。俺の幸福の絶頂を祝福し、併せて君等日本人が一日も早くダモイできることを祈つてというような、うるわしい動機からの招待ならば嬉しいけれど、どうもそうではないらしい。苦勞して築いたこの幸福を象徴する新居を不特定多数の人に見せたいという願望、されど来て間もない病院には親しい友人もおらず、と考えながら歩いていたら、幸か

不幸か視線が我々とぶつかった。そこで新づくりの仕事は「グリコ」のおまけみたいにはんの付け足し、意図させるものは自己の満足感や優越感を満たすという魂胆なのだと、憶測の域は出ないがそう思わざるを得なかった。そして、病院での軍曹のあの笑顔は我々に示した好意といい気になっていたのは買いかぶりの大誤算、中身は独り笑いだったのである。陰で同僚と「こん畜生」と舌打ちし、我々にこんなところを見せやがってという気も起ったが、そんな繊細な神経など持たぬ彼らであり、寢室まで招じ入れたのもそのおらかな善意と受け止めた。帰りがけに寢室を指さし「ハラショウ」と贅辞をおくり、「それに奥さんもハラショウ」だと思え加えると、軍曹は喜色満面の顔に更に上乘せした笑みの返事を投げ返してきた。

軍曹の家を出ると、シベリアの陽はつかの間と短く、もう暮れていた。街灯のない街は黒々と闇に包まれ、遠い街並みは視界から消えていた。凍った街は未だ宵の口だというのに水を打ったような静けさだ。死んだように何も動かず何も聞こえない。だが私は、と

ある民家の窓の前で悲しいまでにはのかな赤みがかった灯火がにじみ出ているのを垣間見た。物音もせず、家人の気配も感じさせぬ程静かに、只々ボーっと灯っていた。小さくて貧しいが、ほのぼのとした家庭的な温かみがガラスを通し私の胸を募らせてくる。私はその灯をじっと見入った。そして暗い天空を仰いだ。遠い故国の母や妹は無事でいるだろうか。哀々切々の思慕の情が、押し殺したため息が、こみあげてくる郷愁が、そして感情が波のようにゆられて思わず溢れるものが、だがそれをぐっとこらえ、氣をとり直し、そしてねぐらへと闇の中を歩き出したのだった。

「ジマ」よ、さらば

病院が俄に騒がしくなった。地元のジマ収容所ダモイの情報である。一瞬まただまされるのではと身構えたが、収容所を移動することは事実のようで、今度のは手ごたえが感じられた。誰の顔も明るく、各病室はその噂に花が咲いた。しかしこれで同じ収容所で苦勞を共にした戦友との再会ができぬかと、なんとも言えぬ羨望と残された孤独感を味わった。

間もなくして退院者が選ばれ、私を含む病院整作業者と一般退院者の計七人で、行き先は列車で二、三時間のチェレンホーボ収容所と聞き、ここで本格的にダモイ準備と直感した。今までは口の堅かった看護婦なども「ダモイ」の言葉を口にしたりした。これはいよいよ本物だ、体中に幸福感と期待感が広がり、まさに胸中は手の舞い足の踏むところを知らずであった。

私たち退院者七人は、倉庫に保管され返却された軍服に着替え、警戒兵に導かれて夕暮れ近く病院を出発、ジマ駅に向かった。一般乗客並みに駅舎に入るのも客車に乗るのも初めてで、好奇心も手伝い心はうきうきしていた。駅舎内では我々と同系種族であるモンゴル系の乗客の意外と多いのが目についた。製材工場や街中の作業現場ではあまり見かけなかったので不思議に思った。

やがて列車が到着、ホームとおぼしき低いコンクリート台から、日本の列車とは違い見上げるような高いステップをのぼり車内に入ると、入り口に円筒状のストープがあまり暖かそうではなくチロチロ燃えてい

る。内部の客席は収容所の二段ベッドさながら不体裁ながら頑丈な上下二段の木製いす、それも大分古くあちこち傷んでいる。終戦後二年ばかりで無理からぬとは思いが、これが客車かと疑いたくなる。上段は荷物棚かもしれないが、長大な大陸のこととて靴を脱ぎ足を伸ばして休めるようにしたのでだろうと解釈してみたが、実状は土足のままあぐらをかく者、腰掛けて土足をぶらつかせる者などでその真下にいる客は甚だ迷惑千万となるが、幸い乗客は男ばかりで定員の半数にも満たず空いていた。内部がばかに暗いと思つたら照明は数本のロウソクであつた。車両の発電機など故障し修理ができず運行しているらしいが、ロウソクを立てるための「ロウ」を垂らしたかさぶた状のものがあちこちにこびりついており、大分長い間ロウソクで走っているのであろう。

さてもさても、シベリア木線旅客車に抱いた夢と期待は見事に裏切られ、儚く消え去つた。無い無いづくしのシベリア、数々の耐乏生活の徹底さに当初驚いたが、彼らの言動や表情からはそれ程耐乏という意識が

感じられず、結局もとの生活環境レベルが異常に低かつたのであろうと結論づけた。

やがて列車はガタゴトと走り出した。我が人生一大試練の場となり、生涯忘れることのできない「ジマ」、そして再び来ることのない「ジマ」、これが最後の見納めと窓ぎわに寄るが外は暗く殆ど見えない。それでもじつと見つめている。その暗いガラスのスクリーンに様々な情景が写し出されてくる。

たった今さっき病院の門前で手を振り別れを惜しんでくれた雑役婦の「ダスビダーニャ（さようなら）」の声が未だ耳に残っている。昨夜、別れの記念に「月が出た出た……」と片言で歌を唄ってくれた明るい性格の雑役婦、いつもステンカラージンの歌を口ずさみながらの窓ガラス拭きに、ベッドに伏す患者からスカートの音がチラチラ、笑つてからかうと「ニエルジャー（いけない!）」とにらむが、それほど恥ずかしい様子も示さない中年雑役婦。金髪で青い眼、往年のセルロイド人形に似ておりキューピーさんと呼ばれたおとなしい若い看護婦。白衣の腕をまくると赤い毛

むくじやらのたくまשי太腕、胸毛もあるのではと囁かれたが、気は優しく患者には親身になって世話し、皆に感謝された看護婦。痴情関係からソ連将校に病院前の家で射殺され、ゲーペーウーが乗り込み、殺人事件として騒がせた哀れな独身看護婦など、いろいろなことがあった。これらロシア女性たちは、どこの国でも同じかと思うが皆善き人達だった。

友とともに病床で過ごした約一カ月、よく飽きもせず毎日続いたダモイと食い物談義、またダモイを果たせずあのジマ墓地に眠る薄幸なりし友、そして何よりも苦しく辛く、だからこそ思い出も多いジマ収容所、助け励ましてくれた先輩や同年の友、製材所の各種ラポート、鉄道の枕木交換、浴場下水道の穴掘り、オカ川での氷切り作業、楽しみのコルホーズ行き、その帰り道の小川で幼児のごとくはしゃいだ水浴、これらが次々と脳裏に浮かびまた消えていった。

そして今このすべてが過去のものになろうとしている、俺は生きて帰れるんだ！ 体の底から安堵感がわき上がってくるのを覚えた。

列車は既にジマを遠く彼方へ追いやり、暗黒の冬の広野を突っ走っていた。

我が青春試練の地、「ジマ」よ、さらば！

老境の今、シベリアに眠る友を想う

「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」（毎年、花は同じように美しく咲くが、人は、年とともに変わり年老いてゆく。）

近ごろこの唐の劉廷芝の詩が、そして「老いる」という言葉が我が頭の中をよぎることが多い。自分の姿や体の変調、即ち老化が紛れもなく表れ、かつ進みつつあるからであらう。歲月というものは残酷なものである。

ふりかえてみると、我々お互い悲喜こもごもの人生があつたであらう。生まれ出て少年期を、そして軍隊とあの忌まわしい抑留生活、そして復員、結婚生活、子供も生まれ、その子供がまた子供を産み、我々もお爺さんやお婆さんと呼ばれるようになり、その間

には悲しくも父や母を黄泉の旅に送りもした。いろんな思い出が、パチンコ玉のように目まぐるしく去来する。

その人生の青春期として忘れ得ないのは、やはりシベリア抑留であろう。あれから歳月はまるで素知らぬ顔で春秋を繰り返し、もう半世紀近くが流れ去り、今は人生の余生という最終コースを歩むいわば人生を全うせんとする老境の身となった。

ある人によれば、この「余生」または「一種の追加の人生」であっても、それは青春の理想と壮年の行動の期間が終わりこれに次ぐ第三の時期で、自分の一生に決着をつける時期に入ったということで人の生涯の最高の収穫期ともいえる最も充実した最終コースを歩んでいるとも言える、と言っているが、なるほどなあ！とも思える。

今、静かに瞑目し思いをあの遙かなシベリア時代に移すとき、暗闘死闘の明け暮れの末、青春を空しく、最果ての僻地にねぎらう人一人としてなく寂しく眠る薄幸の友を想う。

「ダモイ」、それは父母や妻子に会いたいという唯一つ、唯それだけのことなのにそれが達せられず、悲惨な逆境の中で、「無念！」の一言、若い命を落としただけに、あれから五十年近い人生を歩んだ我々は、今、運命という言葉をしみじみ噛みしめるとともに一層哀悼の想いが滲み出てくるのである。

ジマ病院は街の中にあり、私がいた第五收容所からは約二キロメートルの所にあり、更にジマ市民墓地は病院から北にやはり二キロメートルの街はずれにあった。入院患者の大部分（九割方）はチェレンホーボ收容所から入院された方であった。

私の入院期間は三カ月で、ベッドに伏してたのは一カ月半ほどで、あとは軽作業要員として病院の雑用や墓穴掘り、入院者との接触も夜だけで少なかった。ジマ第五收容所では入所当初三人の方が亡くなられた。この時は未だジマ病院は受入れ準備ができておらず、入院できずに亡くなられ、戦友により裏手空き地に埋葬された。そして間もなくジマ病院が開設、ここで亡くなられた多数の戦友はジマ市民墓地に病院側の手に

より埋葬されたのである。

これら戦友の墓所は今どのようなになっているのだろうか。あの草原に近いジマ墓地の環境から推するに、恐らく長年の風雨により墓標は勿論、盛り土も消え失せているのではなからうか。そして半世紀近くの歳月が流れ去った今も、ここを訪れ慰めねぎらう人は恐らく無に等しい状態なのではと思われる。墓所穴掘りにかかわった私として、なんとも情けなく、また申し訳なく思う。

今改めて、どうか安らかに眠りくださいますようにと、ご冥福を祈らずにはられない。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十一年十月二十五日 東京都品川区戸

越にて出生

学歴 東京、旧制工業学校卒

職歴 東京都品川区 神明電舎設計部入社

昭和十八年四月から兵役により休職し、二十二年七月復職

軍歴

昭和三十六年静岡県沼津市の新工場に配転その後、定年退職

昭和十八年四月宮城県名取郡第十二航空教育隊に入営

九月満州に転属

以後、次のように各部隊に転属

牡丹江ボツリ縣青山堡飛行場大隊

白城子、臨時編成された教育飛行隊（特別操縦見習士官の飛行訓練部隊）

奉天奉集堡第三飛行場大隊

ハルビン郊外の拉林航空教育隊（満州各

航空隊所屬の初年兵を集め、飛行機整備の特業教育部隊）

ソ連軍侵入により部隊解散、全員それぞれ各原隊へ復帰

終戦、武装解除

奉天で貨車乗車、ハルビン・黒河經由ソ連領内入り

二十年十一月イルクーツク州ジマ第五収

59

容所に抑留

二十二年五月ナホトカ港から大郁丸にて
舞鶴上陸、復員

平成十年七月、イルクーツク地方慰靈訪問団に妻を
伴い参加し、五十二年ぶりに亡き戦友を埋葬したジマ
を初め、チェレンホーボ、トゥルン、マラトボ、リス
トビヤンカ等を墓参した。

現在イルクーツク地方復員者の会を組織し、シベリ
ア抑留犠牲者、戦友会等の情報交換、親睦に尽力して
いる。

(岩手県 田辺 壮久)

帰る日もくる 春が来る

岩手県 平田 玉男

遅い朝食後に「全員集合!」の命令。中隊長の顔色
が悪い。「全員東の方の空に向かい(祖国日本)遙拝、
捧げ銃」。ラッパが鳴り響く、皇御国の吹奏。
すめらみくに

あちこちに誰が立てたか降伏の印の“白旗”がうら
めしそうに風に揺れている。背中に水を入れられたよ
うな、ゾクゾク身震いが起こる感じであった。とにか
く、口には言葉が出てこない。

寝耳に水の“終戦の一報”である。誰もが信じられ
ないようであった。隊長殿は、唇を震わせながら武装
解除の伝達である。誰もが口を閉ざして、一瞬何も言
わずにただ呆然としている。

我々日本軍は敗れたのか……。

やがて、今日まで我々と生死を共に暮らして来た武
器は、直ちに集められて山積みとなる。隊長殿は、目
を潤ませながら「武器に向かって敬礼!」

昭和二十年八月十五日を過ぎ、間もなくソ連軍の戦
車やトラック等が押し寄せて来た。我々の前に来て、
何かしゃべっている。言葉がサッパリ分からない。次
に通訳と何か話し合っている。その間に鉄条網が張り
巡らされてしまい、その中に隊長以下全員が入れられ
た。ソ連軍の監視兵が見張る。我々は捕虜になったの